

NETTI-PAKARAṆA

— Desanā-hāra の章 — 解析

春 田 神 靜

パーリアビダナマ論書ネッティパカラナは、註釈家たる専門家のための専門書であるが、それはまた専門家の基礎的な文献といえる。經の解説そのことを目的とするものでなく、それがための方法論の書である。則ち註釈家が註釈を著わす際に、註釈に誤まりのない一定の指針を与える手引きとなるような特異な性格を有す。規矩となるべき幾多の装置を設定して、それを有機的に且つ縦横に駆使し適用させることにより、註釈家の独断や推量を排除し、上座部リズムからの逸脱を防ぎ、正しい經典解釈に導こうとするものである。

16 *hara*・*o naya*・18 *mulapada* から成る基準装置はまた、經典語句に内在する *byañjana* (辞書的・規範的語彙) と *attha* (經典の目途する文脈的意味) の二つの局面のうちを組み込まれ、更に三者緊密なる内的連関をもつて構成される。その結果、ネッティの孕む論理構造は決して平坦なものでなく、如上の諸基準を様々に操作することによって、立体的乍ら極めて錯綜した位相を示している。

その本 *Desanā-hāra* の章に於て、*desanā* とは *dhamma-desanā* (法の説示) のことであり、此処で言ひ *dhamma* は四聖諦を指す。

Assādam, adhanavam, nissaraṇam, phalaṃ, upāyaṃ, ānātim,

Dhamman vo bhikkhāre desissāmi atikkhāvāṇam majjhe kal-
vāṇam pariyosnakkalyāṇam sālhanam saḍḍhāṇāṇam, kevala-pari-
puṇṇam parisuddham brahmacariyaṃ pakāssissāmi ti.
(斜字体の部分: D. i. 62, M. i. 344 etc.)

本章は添皆、この一節を分析することと充つてゐる。

- ① *assāda* (衆味) ② *adhanava* (過患) ③ *nissaraṇa* (出離) ④ *phala* (結果) ⑤ *upāya* (方便) ⑥ *ānāti* (指斥) は、それぞれ *dhamma* 《四諦》の種々なる相を表わし、②④→④ ①→④ ③→④ ⑤⑥→④のように対応する。

次に、教の対象となる *puggala* のレベルを分類し、説示のしかたを述べる。機品の上から下へと次第して、type(A): *ugghatitānaṃ* (略説により知る者) とは③ type(B): *vipañcitanṇu* (広説により知る者) には② type(C): *neyya* (導かざるべき者) には①②④を示せばよい。また、(A)には他人の声より生ずる *sutamayi-pañña* (聞所成慧) 及び各自の起てした如理作意より生ずる *cintāmayi-pañña* (思所成慧) が存し、(B)には聞慧のみ存し、(C)には聞慧も思慧も存しなると言ひ。

この二つ *byañjana* の六項の中、世尊は(i) *akkhara* にその *saṅkāsēti* ① (ii) *pada* にその *pakāsēti* ② (iii) *byañjana* にその *vivarati* ③ (iv) *ākāra* にその *vibhajati* ④ (v) *nevuta* にその *utānkaroti* ⑤ (vi) *niddesa* にその *paññāpeti* ⑥。将又、世尊は(i)②(ii)④にその *ugghateti* ① (iii)⑤(v)にその *vipaccayati* ② (iv)⑥にその *vithareti* ③。これに冒頭節中の「始よべ、中よべ、終よま、の句との関連も顧慮すれば、次のような表が出来上がる。

